

令和元・2年度 研究のあゆみ

# はさま第21集

児童生徒一人一人の目標到達に迫る  
カリキュラム・マネジメントの在り方

～各教科の具体的な目標・内容表と

三つの柱に基づいた年間指導計画の活用を通して～



宮城県立迫支援学校

## 目 次

I 研究主題	1
II 主題設定の理由	1
1 新学習指導要領の特徴から	
2 特別支援教育の各教科の内容について	
3 教科等を合わせた指導について	
III 研究目標	2
IV 研究の内容と方法	2
1 研究の内容と方法	
2 研究の計画	
3 研究の全体構想図	
V 研究の概要	6
1 研究の経過	
2 研究の実際	
VI 研究のまとめ	20
1 研究の成果	
2 今後の課題	

# 令和2年度 迫支援学校 共同研究

## I 研究主題

児童生徒一人一人の目標達成に迫るカリキュラム・マネジメントの在り方  
～各教科の具体的な目標・内容表と三つの柱に基づいた年間指導計画の活用を通して～

## II 主題設定の理由

### 1 新学習指導要領の特徴から

平成29年4月、特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領が告示された。今回の改訂では生きる力を育むための資質・能力を明確にしつつ、「知識及び技能が習得できるようにすること」「思考力、判断力、表現力等を育成すること」「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」の3つの柱を実現できるようにすることを求められている。また教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立て、カリキュラム・マネジメントを実施していくことで、各学校の教育活動の質の向上を図っていくことなども求められている。またインクルーシブ教育推進の見地からも各教科の内容が大幅に見直され、通常の学校の各教科との接続を踏まえた視点が新たに取り入れられた。

### 2 特別支援教育の各教科の内容について

今回の改訂においては、各教科の具体的な目標・内容を示された。具体的な指導内容（指導内容表等）は各学校で作成されるもので、法的拘束力を持たないが、各教科の内容は学習指導要領に示されるもので、これには法的拘束力が伴う。原則、これらの内容を指導しなければならないということになる。さらに従前の指導内容表が情報過多だったのに対し、上位の分類となる各教科の内容が具体的に示されたことで、内容を統合しながら情報量を減らすことも期待できる。特別支援教育の各教科の内容は個々の特性に合わせ、自立した生活に必要な知識や技能、表現の育成につなげることができるものである。各教科の具体的な目標内容については全教員で共通理解を図り、共有する必要があると考える。また各教科の具体的な内容の理解と活用については、教育課程を編成する上で、また日頃の授業を実施する上でも非常に重要な要素であることも併せて共通理解を図る必要があると考える。

### 3 教科等を合わせた指導について

教科等を合わせた指導は個々の特性に合わせた指導として、日常生活の指導や生活単元学習などとして多くの学校で取り入れられている。だが各教科の内容と、合わせた指導との関連は、いわゆる教育課程の二重構造として説明はされてきたものの、実生活を重んじた指導であるため、単元、題材の目的や指導内容と各教科等との関連を具体的に想定して計画することが難しいとされ、指導の結果として各教科の内容が習得されると言われてきた。児童生徒にとっては、生活単元学習で取り組む学習活動は、いろいろな領域や教科の内容を習得するための活動ではなく、生活上の課題を成就するための活動である。生活上の課題を成就するための活動に取り組む過程で、結果として、いろいろな領域や教科の内容が習得されるの

である。そのため本来、学習指導要領の内容を指導するための、方法としての教科等を合わせた指導が、内容と方法の一体化などと特別支援教育の独自性を強調するケースも聞かれるようになった。今回の改訂において取り組むべき内容の一つとしてカリキュラム・マネジメントが挙げられている。これは各校における教育課程をP D C Aサイクルでより充実したものを目指すと同時に、広く社会に公開して説明していくものである。そのため教科等を合わせた指導においても、目標や指導内容等と各教科との関連を明確にする必要がある。特別支援学校学習指導要領解説教科編に次のような一文が新たに足されている。「また、各教科等を合わせて指導を行う場合においても、各教科等の目標を達成していくことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要となる。」従前は指導の結果としての各教科の内容の習得であったが、今回の改訂により指導計画を作成する段階で実際的な生活の流れを重視しながらも、各教科等との関連を明確にしていくことが大切である。

以上ことから、育成を目指す資質・能力と学校教育目標、学部教育目標、各単元の目標等との関連の明確化、各教科の具体的目標・内容についての理解、カリキュラム・マネジメントの構築のための教科等を合わせた指導と各教科の内容との関連の明確化、そしてP D C Aサイクルに基づいたカリキュラム・マネジメントの推進に取り組んでいく必要があると考え、本主題を設定した。

### Ⅲ 研究目標

育成を目指す資質・能力を明確にし、各教科の具体的な目標・内容についての共通理解を図るとともに、年間指導計画など既存の計画やツールなどに改善を加えながら、児童生徒一人一人の目標到達に迫るカリキュラム・マネジメントの在り方を探る。

### Ⅳ 研究仮説

①教科部会を設定し、「各教科の具体的目標・内容」についての検討を重ねることで理解を深める。②単元や題材の目標を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性」の三つの柱で検討し、年間指導計画を作成する。③三つの柱に基づいた授業作りを行う。④全教員による教育課程の策定、実施、評価、改善というP D C Aサイクルのさらなる推進。と以上のことについて、学校全体として継続して取り組んでいくことで、児童生徒一人一人の目標到達に迫るカリキュラム・マネジメントの在り方が明らかになるのではないかと。

### Ⅴ 研究の方法と内容

#### 1 研究の方法と内容

- 1) 「各教科の具体的な目標・内容表」の検討、作成
  - ① 教科部会を編成する。
  - ② 特別支援学校学習指導要領解説各教科編（小学部・中学部）から各教科の目標と段階別目標、具体的内容を三つの柱に応じて、それぞれの観点別に整理する。
- 2) 「年間指導計画（新様式）」の検討、作成
  - ① 年間指導計画と各単元、題材の反省用紙の書式を改訂する。
    - 各単元・題材の目標を三つの柱に応じて分析して記載する。

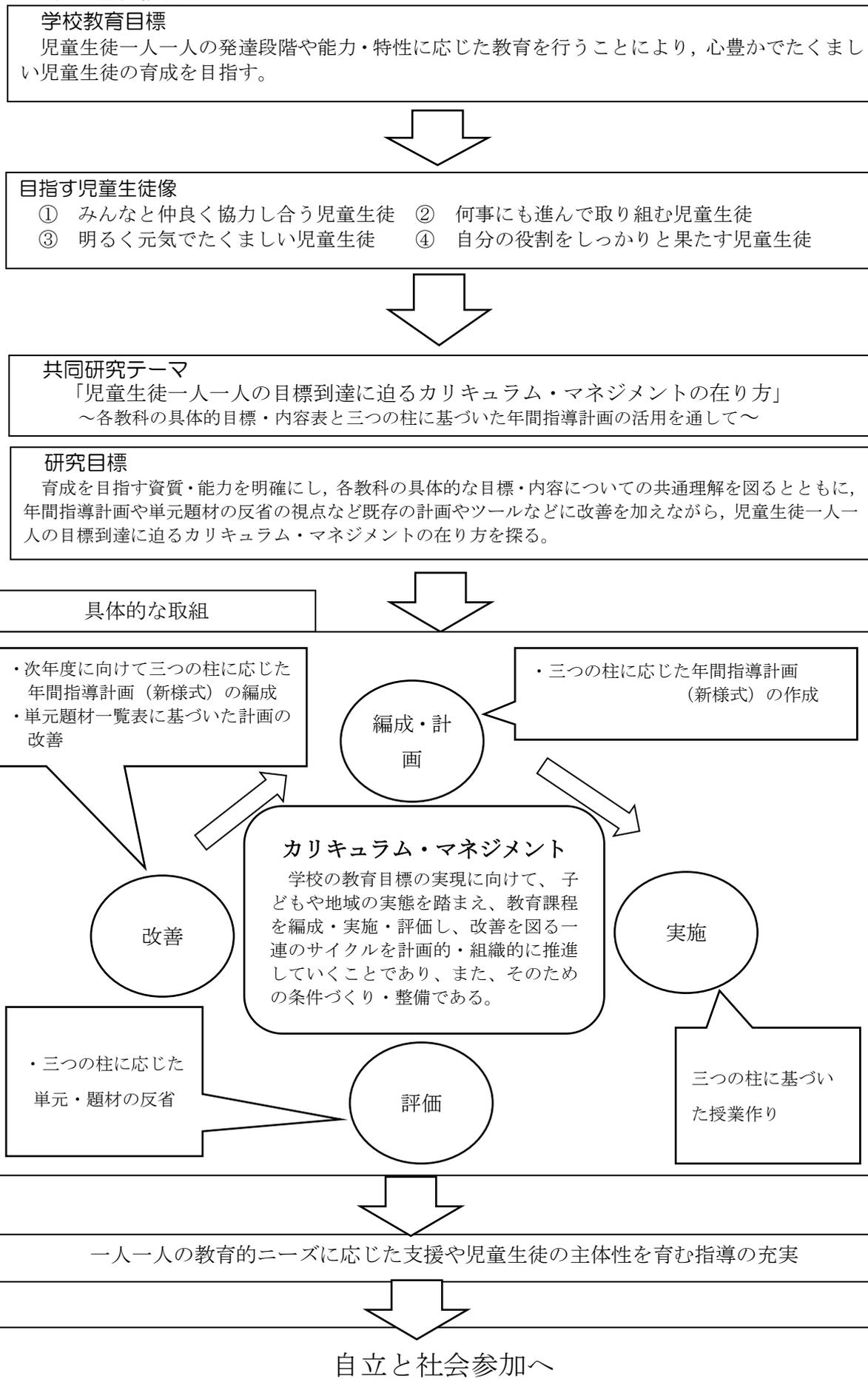
- 各単元・題材の目標と各教科の具体的内容との関連づけを図る。
  - 各単元・題材の目標と各学部の目標との関連づけを図る。
- 3) 三つの柱に基づいた授業作り
- ① 三つの柱に基づいた授業作りに取り組む。
    - 三つの柱に基づいて、目標や評価の視点を設定する。
    - 単元（題材）に含まれる各教科の具体的な内容について考察する。
    - 三つの柱に基づいて設定した目標到達に向けた手立ての工夫を行う。
- 4) 「単元・題材内容一覧表」の検討，作成
- ① 各教科の具体的内容を生かした単元・題材内容一覧表の検討と作成を行う。
- 5) PDCAサイクルに基づいたカリキュラム・マネジメントの推進について
- ① 教務部と連携を取りながら，カリキュラム・マネジメントの推進に取り組む。

## 2 研究の計画(令和元年度から，令和2年度までの2年間)

		主な取り組み
一 年 次	4月	研究部内での計画の立案，検討。教務部と計画案についての検討。
	5月	
	6月	◎ 第1回研究全体会 ・計画の詳細を提案する。
	7月	○ 第1回教科部会（小・中学部版作成） ・各教科の具体的な目標・内容表の書式，作成方法，日程について共通理解を図る。 ・分担を決める。
	8月	○ 第2回教科部会（小・中学部版作成） ・各教科の具体的な目標・内容表の作成。 ・それぞれの観点別に三つの柱を設けて整理する。
	9月	○ 第3回教科部会（小・中学部版作成） ・各教科の具体的な目標・内容表の作成。（完成）
	10月 11月	◎ 第2回研究全体会 ・各教科の具体的な目標・内容表の配付。 ・今後の活動についての説明。 ・カリキュラム・マネジメントの概要説明 ・各教科の具体的な目標・内容表を用いた年間指導計画（新様式），単元・題材一覧表についての提案をする。
	12月	□ 第1回研究学部会（年間指導計画の新様式の共通理解のため） ・授業のサンプル（11月実施の授業について）を用いて単元・題材の反省と次年度計画について話し合う。
	1月	□ 第2回研究学部会（年間指導計画の新様式の共通理解のため） ・授業のサンプル（12月実施の授業について）を用いて単元・題材の反省と次年度計画について話し合う。
	2月 3月	◎第3回研究全体会 ・1年次研究のまとめと2年次研究計画の提案。

二 年 次		主な取り組み
	4月	○ 研究部内での計画の立案, 検討。教務部と計画案についての検討。
	5月	○ 第1回研究全体会 ・研究計画や日程等を提案。 ・具体的な取り組み等の説明。
	6月	○ 第1回教科部会 (高等部版作成) ・各教科の具体的な目標・内容表の書式, 作成方法, 日程について共通理解を図る。 ・分担を決める。
	7月	○ 第2回教科部会 (高等部版作成) ・各教科の具体的な目標・内容表の作成。
	8月	○ 第3回教科部会 (高等部版作成) ・各教科の具体的な目標・内容表の完成。
	9月	○ 拡大教科部会 (高等部版作成) ・各教科の具体的な目標・内容表 (小, 中, 高) の確認 ・今後の取り組みについての確認
	10月	○ 第1回研究学部会 ・研究授業に向けた話し合い。 ・三つの柱に基づいた授業作り。
	11月 12月	○ 研究授業 ・小学部 生活単元学習      ・中学部 音楽      ・高等部 生活単元学習 ○ 研究授業事後検討会 ・ワークショップ型の検討会を行い, 成果と課題について話し合う。
	1月 2月	○ 第2回研究全体会 ・研究のまとめについて。
	3月	○ 第3回研究全体会 ・次年度の研究についての提案等。

### 3 研究の全体構想図

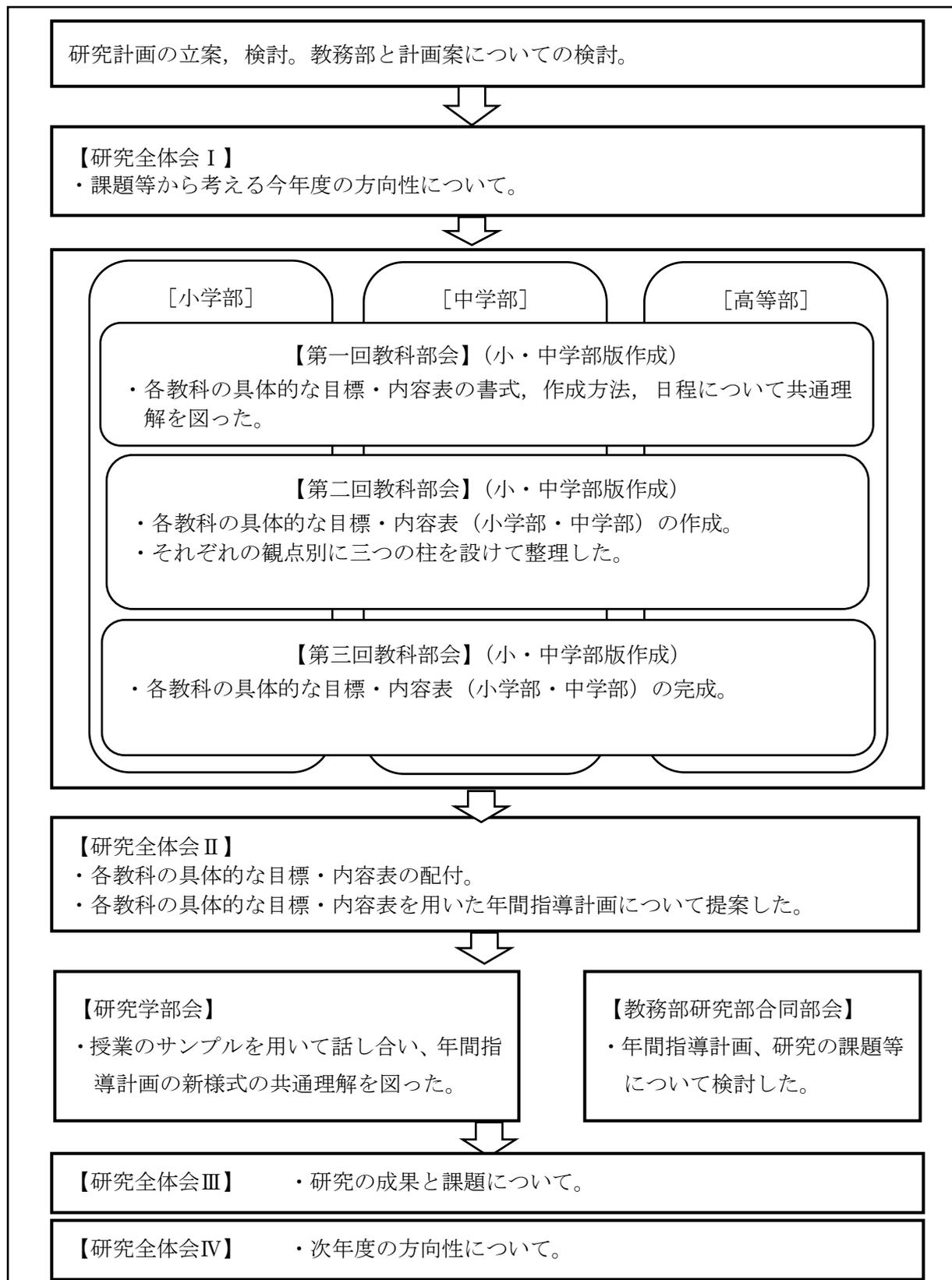


## VI 研究の概要

### 1 一年次の研究の経過

児童生徒一人一人の目標達成に迫るカリキュラム・マネジメントの在り方について探るため  
教員相互で学び合いながら、以下の流れで取り組んだ。

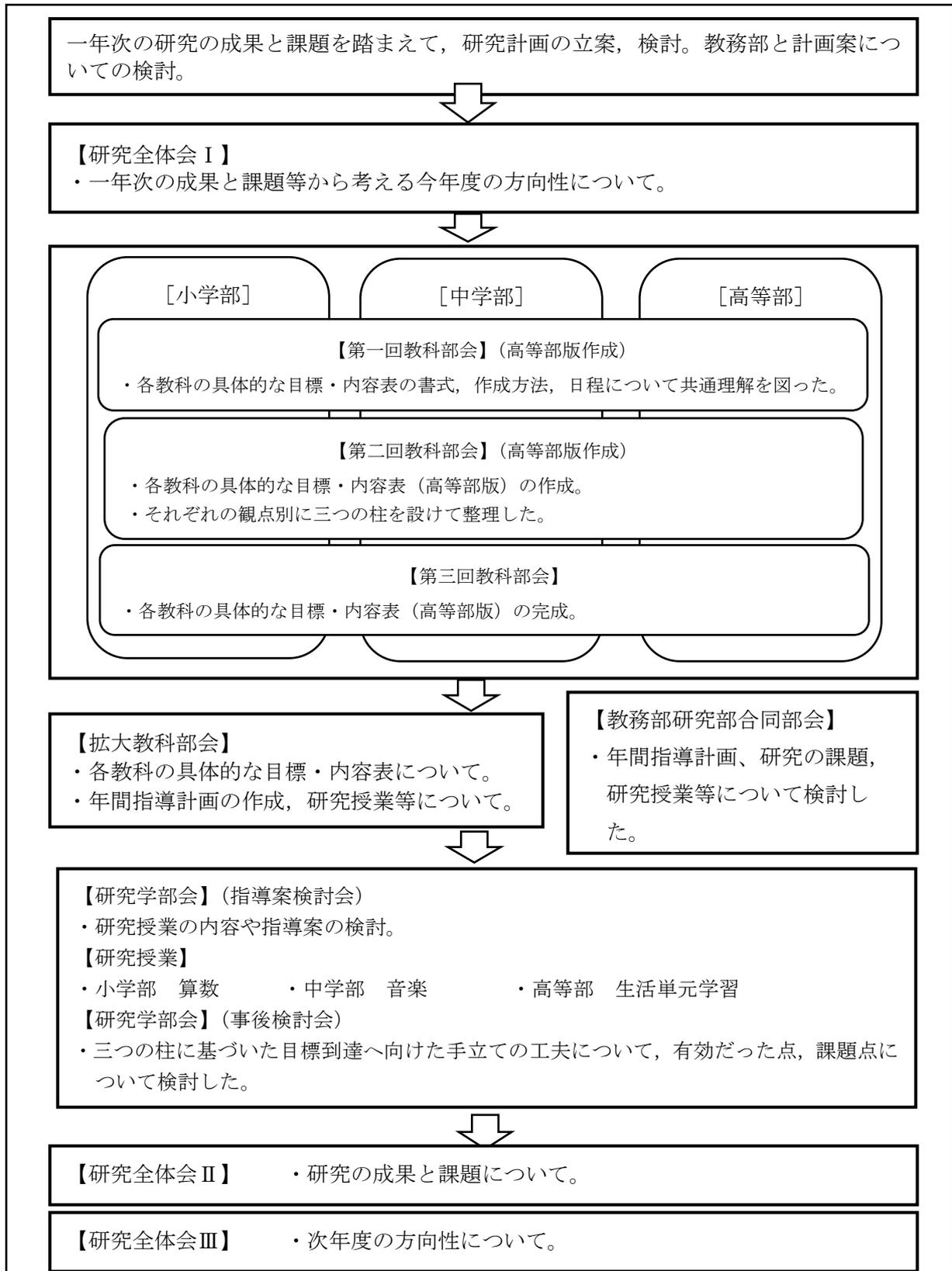
#### 【一年次（令和元年度）】



## 2 二年次の研究の経過

一年次の研究の成果と課題を踏まえて、児童生徒一人一人の目標到達に迫るカリキュラム・マネジメントの在り方について探るため教員相互で学び合いながら、以下の流れで取り組んだ。

### 【二年次（令和2年度）】



## 2 研究の実際(二次)

### 1) 「各教科の具体的な目標・内容表」の検討, 作成について

目標・内容の一覧〔生活〕						
生活科の目標						
具体的な活動や体験を通して、生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。						
三つの柱に基づいた目標	知識及び技能	(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活に必要な習慣や技能を身に付けるようにする。				
	思考力、判断力、表現力等	(2) 自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて理解し、考えたことを表現することができるようにする。				
	学びに向かう力、人間性等	(3) 自分のことに取り組んだり、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしようとする態度を養う。				
各段階ごとの目標		1段階	2段階	3段階		
	知識及び技能	1 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴に関心をもつとともに、身の回りの生活において必要な基本的な習慣や技能を身に付けるようにする。	1 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴や変化に気付くとともに、身近な生活において必要な習慣や技能を身に付けるようにする。	1 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わりに関心をもつとともに、生活に必要な習慣や技能を身に付けるようにする。		
	思考力、判断力、表現力等	2 自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて関心をもち、感じたことを伝えようとする。	2 自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて気づき、感じたことを表現しようとする。	2 自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて理解し、考えたことを表現することができるようにする。		
具体的な内容と6桁コード	学びに向かう力、人間性等	3 自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に関心をもち、意欲をもって学んだり、生活に生かそうとしたりする態度を養う。	3 自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけようとする態度を養う。	3 自分のことに取り組んだり、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしようとする態度を養う。		
	内容	1段階	2段階	3段階		
		コード	具体的内容	コード	具体的内容	コード
ア基本的な生活習慣		1 食事や用便等の生活習慣に関わる初歩的な学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。	1 食事、用便、清潔等の基本的な生活習慣に関わる学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。	1 身の回りの整理や身なりなどの基本的な生活習慣や日常生活に役立つことに関わる学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。		
	011001	(1) 簡単な身辺処理に気付き、教師と一緒に行動とすること。	012001	(1) 必要な身辺処理が分かり、身近な生活に役立てようとする。	013001	(1) 必要な身辺処理や集団での基本的な生活習慣が分かり、日常生活に役立てようとする。
	011002	(2) 簡単な身辺処理に関する初歩的な知識や技能を身に付けること。	012002	(2) 身近な生活に必要な身辺処理に関する基礎的な知識や技能を身に付けること。	013002	(2) 日常生活に必要な身辺処理等に関する知識や技能を身に付けること。
イ安全		1 危ないことや危険な場所等における安全に関わる初歩的な学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。	1 遊具や器具の使い方、避難訓練等の基本的な安全や防災に関わる学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。	1 交通安全や避難訓練等の安全や防災に関わる学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。		
	011003	(1) 身の回りの安全に関心を持ち、教師と一緒に安全な生活に取り組もうとすること。	012003	(1) 身近な生活の安全に関心を持ち、教師の援助を求めながら、安全な生活に取り組もうとすること。	013003	(1) 日常生活の安全や防災に関心を持ち、安全な生活をするよう心がけること。
	011004	(2) 安全に関わる初歩的な知識や技能を身に付けること。	012004	(2) 安全や防災に関わる基礎的な知識や技能を身に付けること。	013004	(2) 安全や防災に関わる知識や技能を身に付けること。

〈 各教科の具体的な目標・内容表 (生活科より) 〉

生活(生活・社会・理科), 国語(国語・外国語), 算数(算数・数学), 音楽, 体育(体育, 保健体育) 図工(図画工作・美術), 職家(職業家庭・情報)の各教科部会を編成し, 部会ごとに検討・作成を行い, 新学習指導要領の各教科の具体的な内容に基づいた, 「各教科の具体的な目標・内容表」を作成し, まとめることができた。そして, この「目標・内容表」を拡大教科部会, 研究学会等を用いて, 全教員で共有し, 新しい年間指導計画の作成に, 学部ごとに取り組んでいるところである。全教員で教科部会を編成し, このA3サイズ, 50ページに亘る「各教科の具体的な目標・内容表(小学部・中学部・高等部版)」の検討・作成を行ったことは, 本研究の柱であり, 成果の一つである。今後も, この「各教科の具体的な目標・内容表」についての内容の理解を深めていきたいと考える。

学習指導要領に基づいたこの表は, 本研究で取り組んできたカリキュラム・マネジメントの推進に必要なツールの一つであり, 教科等を学ぶ意義や教科等間・各学部間, 各段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成を行う上で, 大切な指針となるものであると考える。全教員が二年に渡って携わり, 共有したこの「各教科の具体的な目標・内容表(小学部・中学部・高等部版)」を今後も効果的に活用し, 学習指導要領の方向性の一つである「何を学ぶのか」という視点を大切に進めていきたいと考える。

<教科部会一覧>

	小学部教科	中学部教科	高等部教科
生活部会	生活	理科, 社会	理科, 社会
国語部会	国語, 外国語	国語, 外国語	国語, 外国語
算数部会	算数	数学	数学
音楽部会	音楽	音楽	音楽
体育部会	体育	保健体育	保健体育
図工部会	図画工作	美術	美術
職家部会		職業家庭	職業, 家庭, 情報

<各教科の具体的な目標・内容表のコードについて>

内容	1段階		2段階		3段階	
	コード	具体的内容	コード	具体的内容	コード	具体的内容
ア 基本的な生活習慣		1 食事や用便等の生活習慣に関わる初歩的な学習活動を通して, 次の事項を身に付けることができるよう指導する。		1 食事, 用便, 清潔等の基本的な生活習慣に関わる学習活動を通して, 次の事項を身に付けることができるよう指導する。		1 身の回りの整理や身なりなどの基本的な生活習慣や日常生活に役立つことに関わる学習活動を通して, 次の事項を身に付けることができるよう指導する。
	011001	(1) 簡単な身近処理に気付き, 教師と一緒に行動とすること。	012001	(1) 必要な身近処理が分かり, 身近な生活に役立てようとする。	013001	(1) 必要な身近処理や集団での基本的な生活習慣が分かり, 日常生活に役立てようとする。
	011002	(2) 簡単な身近処理に関する知識や技能を身に付けること。	012002	(2) 身近な生活に必要な身近処理に関する基礎的な知識や技能を身に付けること。	013002	(2) 日常生活に必要な身近処理等に関する知識や技能を身に付けること。

◎六桁のコードについて

※始めの二桁の数字は各教科を表すものとして設定する。

01 (生活) 02 (国語) 03 (社会) 04 (算数・数学) 05 (理科) 06 (音楽) 07 (図画・美術)  
08 (保健体育) 09 (職業) 10 (家庭) 11 (外国語) 12 (情報)

※三桁目の数字は各段階を表すものとして設定した。

1 (小学部 1段階) 2 (小学部 2段階) 3 (小学部 3段階) 4 (中学部 1段階) 5 (中学部 2段階)  
6 (高等部 1段階) 7 (高等部 2段階)

※四～六桁目の数字は, 整理番号として設定した。

2) 年間指導計画（新様式）の検討，作成について

指導の形態												単元名		
期間												時数		
目標	知識及び技能		<p>【目標について】</p> <p>※三つの柱に基づいた目標の設定を行います。</p>											
	思考力，判断力，表現力等													
	学びに向かう力，人間性等													
含まれる教科の内容	教科	生(01)	国(02)	社(03)	算(04)	理(05)	音(06)	図(07)	体(08)	職(09)	家(10)	外(11)	情(12)	
	主コード													
	副コード													
小単元	主な学習活動					指導に当たって					準備物等			
係分担	<p>【目標に含まれる教科の内容】</p> <p>※目標と各教科の内容についての関連を記すものがある。</p> <p>※「各教科の具体的な目標・内容表」から，下4桁のコードを記入する。</p> <p>※その単元で扱われる，主（メイン）となる内容を主コードの欄に，副（サブ）となる内容を副コードの欄に記入する。</p>					<p>【6桁のコードについて】</p> <p>※始めの2桁の数字は各教科を表すものとして設定しました。</p> <p>01（生活） 02（国語） 03（社会）          04（算数・数学） 05（理科） 06（音楽） 07（図画・美術） 08（保健体育）          09（職業） 10（家庭） 11（外国語）          12（情報）</p> <p>※3桁目の数字は各段階を表すものとして設定しました。</p> <p>1（小学部1段階） 2（小学部2段階）          3（小学部3段階）          4（中学部1段階） 5（中学部2段階）          6（高等部1段階） 7（高等部2段階）</p> <p>※4～6桁目の数字は、整理番号として設定しました。</p> <p>001 002 003 004 005・・・</p>								
	<p>【主コードと副コードについて】</p> <p>※三つの柱に基づいた単元の目標到達へ向けて主として扱われる内容については，主（メイン）コードの欄に記入する。</p> <p>※目標には直結しないが，単元の中で取り扱う「各教科の内容」を副（サブ）コードの欄に記入する。</p>					<p>【（単元に）含まれる教科の欄の変更について】</p> <p>※「一覧表+主・副コードに分けた形式」にしたことで，単に各単元においてどれくらいの各教科の具体的な内容が取り扱われているのかについて網羅するという視点のみならず，取り扱われている教科のバランスや，この単元で主（メイン）として扱われる内容はこれで良いのか，この内容は副（サブ）で良いのか，という視点からも検討がなされやすくなるのではないかと考えた。</p>								

今回の学習指導要領改訂では、各教科の目標を達成することを前提として合わせた指導を考へることが明確にされたことで、①「計画を作成する段階で各教科の内容の何を指導するのか明確にする必要があるのではないか。」②「指導・支援するという教師側の明確な意図を踏まえることを考へると、目標と各教科との関連を明確にするのが適切ではないか。」と考へ、年間指導計画の様式を検討、改善し、作成に取り組むことができた。改善した点は、目標を設定する観点として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱を設けたこと、単元題材の目標や内容と各教科との関連をコードで記載する欄を追加したことの二つである。

年間指導計画の目標を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に応じたものに設定していく上では、教育課程委員会、教務部研究部合同部会、研究全体会、研究学部会、学部会等を通して、話し合いや検討を重ねることができた。一年次の研究においては、学部ごとに、サンプルとなる単元・題材を設定し、その単元・題材の「三つの柱に基づいた目標」「単元題材の目標・内容に含まれる教科の目標・内容（各教科の具体的な目標・内容表に表されている六桁のコードの記載）」等について、話し合いを行うことができた。また、二年次の取組では、小学部（算数）、中学部（音楽）、高等部（生活単元学習）の研究授業を設定し、それぞれの授業の学習指導案の検討会において、三つの柱に基づいた目標、単元題材の目標・内容に含まれる教科の目標・内容について検討することができた。これらの取組は、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力についての教員間での共通理解につながるとともに、学習指導要領の方向性の一つである、新しい時代を生きる力を育成するために、学校教育全体及び各教科等の指導を通して、どのような資質・能力の育成をねらうのかを「何ができるようになるか」という視点で整理することにつながったものとする。また、年間指導計画や目標を設定する際には、①「児童生徒が既得の知識や技能を活用して思考することにより、知識を相互に関連付けたより深い理解や、他の学習や生活の場面で活用できる習熟した技能として習得されるような学習が必要となること。」②「思考力、判断力、表現力等は、知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な力と規定され、教育課程においては、各教科等の特質に応じて育まれるようにするとともに、教科等横断的な視点に立って、各過程において、言語能力、情報活用能力及び問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成を目指す中で思考力、判断力、表現力等が育まれるようにすること。」③「学びに向かう力、人間性等には、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度、多様性を尊重する態度、互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く含まれていること。」という点を考慮しながら、設定することも共有した。

これらを踏まえ、現在、各学部でそれぞれの単元・題材の年間指導計画を検討・作成しているところである。今後も、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」という視点に沿って、単元・題材の年間指導計画を検討・編成していきたい。

### 3) 三つの柱に基づいた授業作り

小学部（算数）、中学部（音楽）、高等部（生活単元学習）と研究授業を設定し、取り組んだ。研究学部会（指導案検討会）において、①三つの柱（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）に基づいた単元・題材の目標の設定、②単元（題材）で取り扱う各教科の具体的な目標・内容、③三つの柱に基づいた目標の到達へ向けた手立ての工夫、について学部ごとに考察、検討することができた。事後検討会には、ワークショップ型の話し合いを行ったり、ビデオでの様子を視聴し、意見を出したりと様々な方法で、三つの柱に基づいた手立ての工夫について、有効だった点や課題点を集約し、まとめることができた。

#### (1) 小学部 算数「数えてみよう」

授業のビデオを視聴し、意見を集約した。

目 標 手 立 て	目標到達へ向けた手立てについて 良かった、有効だった点	目標到達へ向けた手立てについて 課題、改善点
<p>目標（知識及び技能）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提示されたモールの個数を数え、数字カードで正しく示すことができる。</li> </ul> <p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5個×2の10個枠のトレイを使用し、数を数えやすいようにする。</li> <li>・正確に数えることができるよう、モールを一つずつ声に出して数えるように促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○5個のまとまりとして数をとらえる学習は、とても大切なことなので、トレイを利用することは良かった。</li> <li>○パーテーションを使ったり、一回ごとに必要なもののみ机の上に置いたりして、学習に集中できる場の設定だった。</li> <li>○これまでの学習でトレイの左上からモールを入れるということが身に付いていて、正確に数えるのに有効だと感じた。</li> <li>○提示されたモールをトレイに入れることで、見た目も数えやすくなると思われた。更に、数字カードを自分で選び、読み方も確認できるので、どのくらい理解しているのかも分かりやすいと思った。</li> <li>更に、10以上の数にも応用できると思った。</li> <li>○指示の言葉掛けも、ポイントを押さえていた。頑張ったこと、できたことを認め励ましているのも、意欲を高めるのに効果的であった。</li> <li>○並んでいないものに関しては正しく数えられないという実態から、5×2のトレイを使用したことは、10までの数を正しく数えるために有効だったと思う。</li> <li>5と9を正しく理解できていた。</li> <li>○特に、9個数えて、9の数字カードを</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○正確に数えることを定着させるために、もう少しモールを数える学習を繰り返してもよいのではないか。</li> <li>○教師とマンツーマンで行う学習だけでなく、一人でも取り組める自立課題も入れてみると良いかも。</li> <li>○数が合っているかどうか、先生がもう一度数えて確認してから、「正解！」を伝えると、2回確認することができるのかなあと思った。（次の課題も同じように感じた。）</li> <li>○教材を工夫して、軽くてふわふわしたモールは、転がりやすく、つかみにくそうに授業でも転がっていた。つかみやすく操作しやすい場所で、固定できる物だと更に良かったと思った。例えば、本児の指でつかみやすい大きさの磁石や、磁石シートに好きな動物の絵を貼った教材を作成、使用するというのはどうだろうか。ホワイトボードに動物と数字カードを貼ることで、振り返ることもできると思った。</li> <li>○次の課題は何か、どのような姿を目指すのか、教師自身が理解しておくべき。</li> <li>○自ら取り組もうとする工夫が必要で</li> </ul>

	<p>選んだ時は、教師と目を合わせてタッチ      していて、達成感を感じている様子だ      った。</p> <p>○「一つ一つ、つまんでトレイに入れる」      という行為が真に一対一対応を促すこ      になるので、数唱ができていれば課題は      達成しやすい。</p> <p>○5個×2の10個の枠のトレイを使用し      て視覚的にも数を確認できて良かったと      思った。</p> <p>○トレイを使用していたので、数えやす      かったと思う。</p> <p>○トレイは入れやすく、数えやすく良い      と思った。</p> <p>○試行錯誤しながら児童の実態把握に努      めてきた結果、“取り組む姿”につなが      ったのかなと思った。</p> <p>○5×2の10の枠を使うことで数を視      覚的に分かりやすく捉えられていて良か      ったと思った。枠にバラバラにモールを      入れるのではなく、上段左端から順番に      入れることが定着しており、正確に数を      数えることができていた。</p>	<p>はないか。</p> <p>○好きな絵柄のものを数えさせるのも      良いかもしれない。(ホワイトボード      の枠の中に絵柄のマグネットを貼って      いく。)</p> <p>○モールをトレイに入れるときに、両      手を使って入れたり、順番に入れなか      ったり…ということがあるので、最初      からきちんと数えたらどうだろうか。</p> <p>○丸いモールが転がりやすいのであれば、      四角いものを使えば良いのではな      いか。</p> <p>○モールが滑るのであれば、滑り止め      シートを使用してみてもどうか。</p>
<p>目標 (知識及び技能)</p> <p>・指定された数のモールを、      正しくお皿に置くことがで      きる。</p> <p>手立て</p> <p>・正確に数えることができ      るようモールを操作しなが      ら声に出して数えるように      促す。</p> <p>・数字カードを提示しなが      ら「3をください。」など      と言葉掛けを行い、皿に入      れるように促す。</p>	<p>・教師のやり取りを楽しみながら学習し      ていた。</p> <p>・モールを数えるのを3回くらい、その      後はスプーンやりんごを数えることで、      集中を持続させることができたと思うの      で、良かった。</p> <p>・声に出して、数えることが定着してい      ることが分かった。</p> <p>・モールから身近な物へ定着しているの      が分かった。普段の生活の中でも、生か      すことができる内容だと思った。</p> <p>・教師が提示した数字カードの数だけモ      ールを皿に置くことができていた。(3,      6, 8)</p> <p>・一つずつ指差ししながら正しく数えて      いた。</p>	<p>・正確に数えることを定着させるため      に。もう少しモールを数える学習を繰      り返してもよいのではないかと。</p> <p>・教師とマンツーマンで行う学習だけ      でなく、一人でも取り組める自立課題      も入れてみると良いかも。</p> <p>・先のことを考えて、プリントにシー      ルを貼る学習なども良いかも。</p> <p>・モールを数える時には、前の課題で      トレイを使っていたので、トレイに入      れる作業でもいいのかなと思った。(前      の課題の逆バージョンなので。)</p> <p>・最初や途中で集中しにくい場面が見      られた。(人の出入りもあり、集中し      にくかったかも。)今回は継続してき      たモールを使った学習で良かったと思</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スプーンとかりんごとかのように一つの手に複数個握れないものを数えさせる方が確実に数えられて良かった。</li> <li>・目標が達成していると思われる。ステップアップしても良いのでは。</li> <li>・一つ目の課題に扱うモールは同じでも色が違うことで課題の切り替えになっていたのが良かった。</li> <li>・枠ではなくお皿でも5以上の大きな数を正しく置くことができていた。枠から皿と難易度が上がり段階的に取り組んでいた。反具体物（モール）から具体物（スプーン、りんご）の流れも良かった。</li> </ul>	<p>うが、本時が好きな動物等の教材で立体的の物をおりに見立てたスペースに入れるとか、磁石の教材で種類ごとに分けて動物園を作るとかが良いのでは。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・赤いモールを一度に何個も握って数えていたので、間違いを起しやすかったので一つずつとって皿に移動させた方が良いと思った。</li> <li>・お皿ではなく、一列に並べることが出来るのが良いのでは。</li> <li>・赤いモールを使って「〇つください。」の時、お皿に入れるのではなく、トレイを使うのも良いかも、と思った。</li> </ul>
--	--	---

(2) 中学部 音楽「ゆめ花太鼓のリズム」

グループに分かれて、ワークショップ型事後検討会を実施し、有効だった点や課題点について検討し、まとめた。

目 標 手 立 て	目標到達へ向けた手立てについて 良かった、有効だった点	目標到達へ向けた手立てについて 課題、改善点
<p>目標（知識及び技能）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・肘を曲げ、肘から先を振り下ろす動きでたたき、曲の最後まで演奏することができる。</li> </ul> <p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師もばちを握り、腕の振り下ろし方を示範し、まねするよう促す。</li> <li>・肘を曲げるよう、様子を見ながら時々、肘から先の部分を教師が持ち上げる補助をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○言葉掛けやジェスチャーが対象生徒に適した指導だった。</li> <li>○教師がそばで示範することで、まねすることができた。</li> <li>○直接体に触れる支援は有効だった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体練習だけでなく個別の指導や丁寧な指導も必要なのではないかな。</li> <li>○生徒が分かりやすいように“今日の注意点”を明示するとよいのではないかな。</li> <li>○示範を見ているのか疑問なところもあるので気付かせるために、もっと視界に入る立ち位置やもっとオーバーアクションでもよいのではないかな。</li> </ul>
<p>目標（思考力・判断力・表現力等）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の身振りで指示を理解し、範奏の音の変化に応じて、リズムや強弱の違いを明確に表現することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○主体性を引き出す指導（始終示範するのではなく必要に応じてジェスチャーで指示を出したり、2回目は支援を減らしたりなど）で良かった。</li> <li>○教師の身振りや指示で、リズムや強弱、</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○強弱を意識させるのは対象生徒には難しかったので、どんな方法だと意識づけられるかな。</li> <li>○「やー」のポーズをキープするのが難しかった。</li> </ul>

<p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「待つ。」「たたく。」「弱く。」「強く。」などを教師が身振りで指示する。</li> <li>・必要に応じて、教師が体に直接触れ、たたくタイミングなどの気付きを促す。</li> </ul>	<p>たたく、待つなどができていた。</p> <p>○強弱のはじめのところで、手で押さえる仕草をしたことで少し意識できた。</p>	
--	---	--

(3) 高等部 生活単元学習「冬休みの生活・新年の抱負」  
授業のビデオを視聴し、意見を集約した。

目 標 手 立 て	目標到達へ向けた手立てについて 良かった、有効だった点	目標到達へ向けた手立てについて 課題、改善点
<p>目標（知識及び技能）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「とめ」「はね」「はらい」を意識して書くことができる。</li> </ul> <p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・メリハリのある字とそうでない字を比較することを通して、字の美しさや字を見たときの印象が変わることに気付けるようにする。</li> </ul>	<p>○視覚的に比較させることで、生徒の気付きを促していた。より良い方法を考える力を伸ばすための一助となると感じた。</p> <p>○タブレットを使っでの提示、分かりやすかったと思った。</p> <p>○意識する点に着目して指導したことは生徒に分かりやすい働き掛けだった。</p> <p>○比較して見せ確認したことで、どのように書くとよいか、より具体的にイメージをもって書き始めることができよかった。</p> <p>○タブレットを用いたことで視覚的に支援ができ、比較しやすかった。</p>	<p>○タブレットを使うと拡大などできて良いが、一人一台必要になる。教師の支援が行き届かない場面でも自ら学べるように、印刷したものを他の生徒にも提示すると良いのでは。</p> <p>○比較する字がもっと対照的なものであるとよりいっそう字の美しさや見た目の印象が分かりやすいかと思いました。また、これから書く字（日、水）の比較のほうがより分かりやすかったと思った。</p> <p>○タブレットの画面に気をつけるべき点を朱書きで書き込めるとより分かりやすいかと思った。</p> <p>○今回、着席をした状態で字を書いていたが、立つ、又は下に置いて立ち膝で書いた方がよかったのではないかと感じた。筆を扱う際に力を入れたり抜いたりしやすかったり、上から紙も含めた文字全体のバランスも見たりできるのかなと思った。</p> <p>○示範するときは生徒側から書くとより筆遣いのイメージが持てるのではないか。</p>

<p>目標（知識及び技能）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・字のバランスを整えて書くことができる。</li> </ul> <p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手本に補助線を入れることで、画の長さ等が分かるようにする。</li> <li>・手本を見ながら字のバランスを教師とともに確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○補助線により文字の配置が分かりやすくなっていた。失敗から学ぶこともあるが、成功体験は子どもの自信になると感じた。</li> <li>○筆を取る前に、丁寧に補助線の確認していた。</li> <li>○筆を取る前に、指で書かせ、筆順やバランスの確認を丁寧に行っていた。</li> <li>○補助線がきっかけになり良い手立てになった。</li> <li>○見本に補助線が入っていたことで、どの位置に、どのくらいのバランスで書けばよいか分かりやすかった。</li> <li>○手本が、すぐに確認できる場所に置いてあり、確認しながら書くことができていた。</li> <li>○手本が紙でよかった。（以前、自分がタブレットで示したときには、時間が経つと画面が消えてしまい、何度も操作する必要が出てきてしまったので。）</li> <li>○手本を何度も見て確認しながら書くことができていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生徒にもよると思うが、用紙全体を見てバランスを整えるためには、立つか床に置いて書いた方が良いのでは。</li> <li>○書いた字を撮影し、タブレットに書き込む形で改善点など示すことができれば、振り返りと今後の課題を示すことができたのではないかと思った。</li> <li>○見本を書いて見せるときには、向かい側からでなく、生徒と同じ方向から書いて見せるといいかと思う。筆の持ち方、動かし方、力の入れ方など伝わりやすいと思う。</li> <li>○時間があれば、指でなぞる後に、墨をつけない筆で半紙に書く学習が入ってもよかったと思う。</li> </ul>
--	--	--

4) 単元・題材内容一覧表について

< 単元・題材内容一覧表 >

指導の形態	生活単元学習	単元名	お正月のくらし		
期 間	1月8日(金)～21日(木)	対 象	小学部1～6年	時数	8
コード	単元・題材で取り扱う各教科の具体的な目標・内容				
21011	(1) 身近な人との関わりや出来事について、伝えたいことを思い浮かべたり、選んだりすること。				
12008	(2) 簡単なきまりのある遊びについて知ること。				
22006	① いろいろな筆記具を用いて、書くことに親しむこと。				
22014	(2) 自分の名前や物の名前を文字で表すことができることを知り、簡単な平仮名をなぞったり、書いたりすること。				

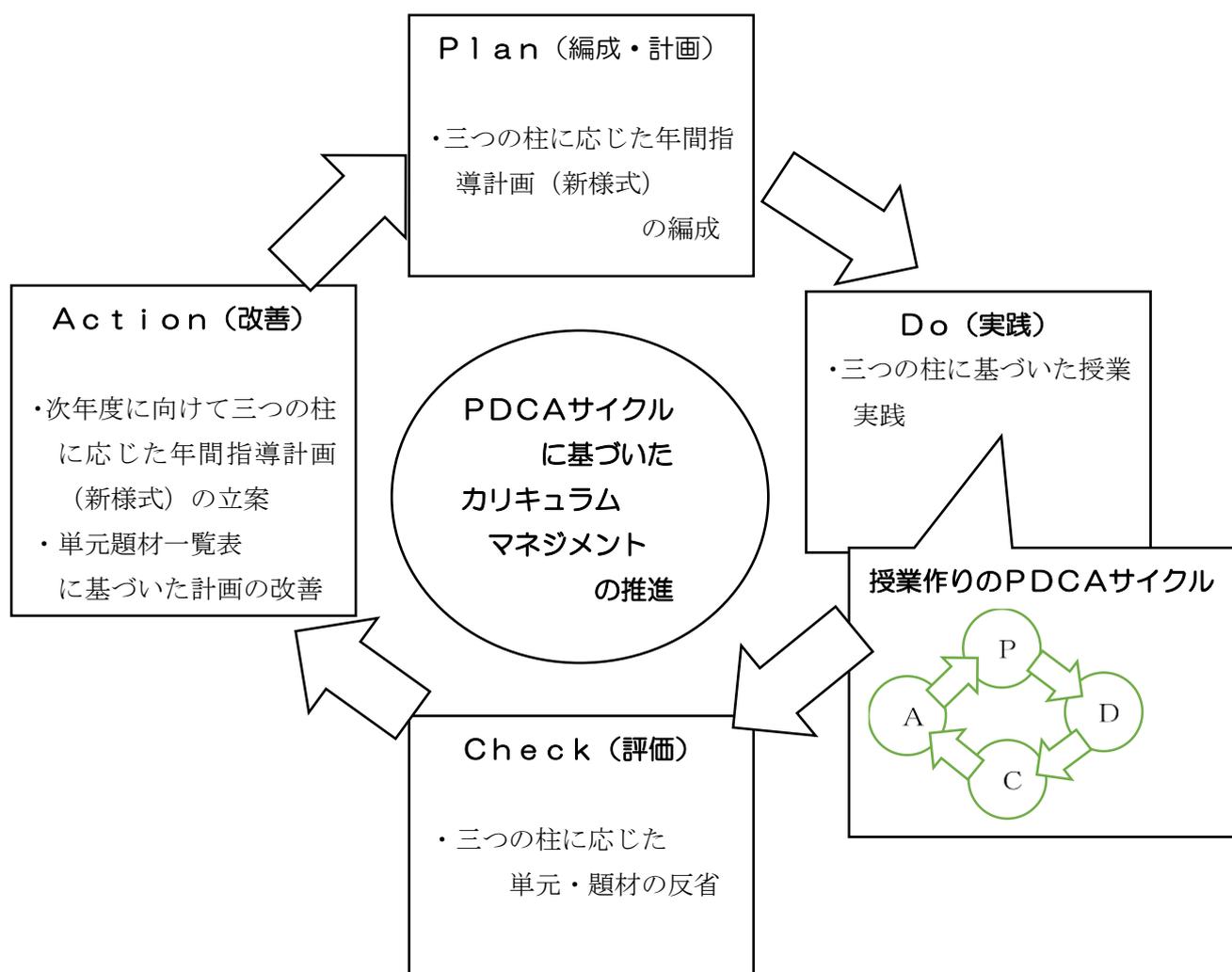
・年間指導計画を基に、「各教科の具体的な目標・内容表」に記されている6桁のコードを入力する。

・単元題材で取り扱う各教科の具体的な内容。

この「単元・題材内容一覧表」は指導の形態ごとに題材、単元と、そこで取り扱う各教科の内容が一覧化されたものである。年間指導計画（新様式）を基に、各題材、単元名、指導の時期、取り扱う内容の6桁コードを入力するものとした。単元・題材内容一覧表は、各学部で取り扱う教科の内容をおおよそで示したもので、これに国語や算数・数学の個別の指導計画などを加え、カリキュラムを説明する際の一つの資料とすることができる。取り扱いのない各教科の内容などもチェックすることができるので、教育課程の改善を図るための重要な資料とすることができるものとする。

各目標・内容の一つ一つに6桁のコードをつけたねらいは、当初は、「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と教科等間・学部間、学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）という視点【年間指導計画への明記】、学習指導要領において示された各教科の目標・内容が、学校のカリキュラムにおいて、どの教科をどれくらい取り扱っているのか、網羅しているのかという視点【単元・題材一覧表の作成】からであった。今後は、カリキュラムや単元題材の評価という観点からの活用も検討していくことも必要ではないかと考える。教育課程を編成する上で、また日頃の授業を実施する上でも非常に重要な要素であることも併せて引き続き共通理解を図っていきたいと考える。

5) PDCAサイクルに基づいたカリキュラム・マネジメントの推進について



< PDCAサイクルに基づいたカリキュラム・マネジメント >

「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、児童生徒の「生きる力」を育てていくためには、①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)②「何を学ぶのか」(教科等を学ぶ意義と、教科間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)⑥「実施するためには何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)の六点に関わる事項を学校が組み立て、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現に向けて、二年間、学校全体として取り組んだことは、カリキュラム・マネジメントに対する共通理解、方向性の共有化をより深めることにつながった。さらには、子供たちが卒業後に社会で生活する姿を描き、小・中・高の各段階を通じ、どのような子供を育てようとするのか、そのためにはどのような教育を行うことが必要かという基本的な考え方を明確にし、教育課程編成に必要な考え方を再確認することができた。

PDCAサイクルに基づいたカリキュラム・マネジメントの運営・推進はこれからも継続

して取り組んでいくものである。この二年間の研究において、検討・作成・実践した「各教科の具体的な目標・内容表」「三つの柱に応じた目標を盛り込んだ年間指導計画」「三つの柱に基づいた授業作り」「指導の形態ごとに題材、単元と、そこで取り扱う各教科の内容が一覧化された単元・題材内容一覧表」等のツールの一つ一つが密接にリンクし、効果的に活用されるよう推進・調整に全教員が関わりながら、チームとして取り組んでいくことが大切である。

カリキュラム・マネジメントにこれからも、どのように取り組んでいくか、上記で述べた六つの枠組みに沿って今後も考察・検討・実施していくことが重要であると考えます。

まずは、学習指導要領を踏まえて「教育内容」を明確にする段階として①「何ができるようになるか」②「何を学ぶのか」についての考察である。「何ができるようになるか」という点では、学校教育目標、保護者の願い、卒業までの身に付けてほしい力、児童生徒の実態等から、三年後を見据えた長期の個別目標と一年後を見据えた短期の個別目標を設定することが必要である。これらを踏まえて、個別的教育支援計画や三つの柱に応じた個別の指導計画を立て、保護者との面談等で活用し、家庭との指導・支援の連携を密にしていくことが必要である。②「何を学ぶのか」という点では、基礎的・基本的な指導内容や、指導内容の精選・重点を置くべき指導内容の明確にし、それらを発展的、系統的に配列・組織するとともに、各教科間の指導内容の相互の関連を図っていきたい。教科等を学ぶ意義と教科等間・学部間、各段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成や学びの連続性の実現に向けた取り組みを推進していきたい。小・中・高と三つの学部それぞれの学部の連携や情報の共有は必要不可欠である。各学部の教育課程の見直しや連携性の構築、学びの連続性の視点からも、「カリキュラム・マネジメント」の考え方や取り組みについて話し合い、検討することは、大変有効であると考えます。

次に、教育内容を踏まえて「個別の指導計画」を作成し実施する段階として③「どのように学ぶか」④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」について考えたい。「どのように学ぶか」という点では、指導形態の選択、指導内容の組織、時数の配分、時間割の作成、個別の指導計画の作成、指導案の作成等を行うことが必要である。そのために、児童生徒一人一人の実態に応じた綿密な個別の指導計画のさらなる活用を推進していきたい。三つの柱に基づいて、それぞれの単元の目標を設定し、その目標到達へ向けた手立ての工夫を考え、計画することが大切である。それにより、児童生徒一人一人の目標到達へ向けたプロセスが明確になるとともに、各教員間そして保護者との情報の共有化にもつながるものと考えます。さらには、今後。「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づいた授業作り、授業改善の充実も必要である。児童生徒のどのような姿が、その学びにつながっているのか、主体的な学びの具体的な姿、対話的な学びの具体的な姿、深い学びの具体的な姿について、考察し、迫支援学校としての具体的な姿、捉えの共有化を図るとともに、主体的・対話的で深い学びを高めるための指導・支援の工夫について考察していくことが重要である。そのためには、主体的・対話的で深い学びを引き出すための授業実践の積み重ねが必要不可欠であると考えます。④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」という点については、個別の指導計画に基づいて、一人一人の実態や発達を踏まえた三つの柱に基づいた目標の到達へ向けた授業作りを行い、その取り組みをPDCAサイクルにのせて、よりよい指導・支援を継続して行うことが大切である。

次に育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿った学習評価の段階として⑤「何が身に付いたか」について考えたい。児童生徒に必要な資質・能力を育てていくためには、各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという教科等の本質的な意義を明確にすることが必要になる。それを踏まえ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの柱に対応した視点から、学習の評価を行うことが大切である。この評価という部分は、より深めて取り組むことができなかった部分である。三つの柱に対応した評価の観点について、さらに検討し、単元題材の反省の分かりやすい様式の検討や授業改善につながる評価の活用について、考察していくことが課題である。

最後に⑥「実施するためには何が必要か」という点から、学習指導要領の理念を実現するために必要な方策については、本研究の中で取り組んできた「各教科の具体的目標・内容表の作成・活用」「三つの柱に基づいた年間指導計画」「三つの柱に基づいた目標到達に迫る授業作り」さらには「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」や「教科部会」「研究学部会」「教育課程委員会」「学校評価委員会」等のツールや取り組み・組織を活用するとともに、学習指導要領の理念や具体的な取り組みについて、情報を発信し、全教員と話し合いや検討を重ねていく必要がある、

「カリキュラム・マネジメント」は、全ての教員が参加することによって作り上げていく営みであるという共通理解の下、チーム学校として継続して取り組んでいくことが最重要ポイントであると考えます。

## VI 研究のまとめ

①教科部会を設定し、「各教科の具体的目標・内容」についての検討を重ねることで理解を深める。②単元や題材の目標を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性」の三つの柱で検討し、年間指導計画を作成する。③三つの柱に基づいた授業作りを行う。④全教員による教育課程の策定、実施、評価、改善というPDCAサイクルのさらなる推進。と以上のことについて、学校全体として継続して取り組んでいくことで、児童生徒一人一人の目標到達に迫るカリキュラム・マネジメントの在り方が明らかになるのではないかと考え、「児童生徒一人一人の目標到達に迫るカリキュラム・マネジメントの在り方～各教科の具体的な目標・内容表と三つの柱に基づいた年間指導計画の活用を通して～」を研究のテーマに設定し、研究実践に取り組んできた。

得られた成果は次の通りである。

### 1 研究の成果

1) 学校の教育目標の実現に向けた、より効果的なカリキュラム・マネジメント実施のための条件づくり・整備の推進

「生活(生活・社会・理科)、国語(国語・外国語)、算数(算数・数学)、音楽、体育(体育、保健体育)図工(図画工作・美術)、職家(職業家庭・情報)の各教科部会を編成し、部会ごとに検討・作成を行い、新学習指導要領の各教科の具体的な内容に基づいた、各教科の具体的な目標・内容表を作成し、まとめること。」「単元・題材の目標を、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性の三つの柱で検討、整理し、単元・題材で取り扱う各教科の目標・内容を明確化した年間指導計画を検討し、作成したこと。」「小

学部，中学部，高等部と研究授業を実施し，三つの柱に基づいた単元・題材の目標の設定や三つの柱に基づいた目標の到達へ向けた手立ての工夫，について考察，検討したこと」とカリキュラム・マネジメントを推進していく上で重要なツールや取組を構築することができた。学校教育全体及び各教科等の指導を通して，どのような資質・能力の育成をねらうのかを「何ができるようになるか」という視点で，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱に基づいて目標を設定するとともに，単元題材で取り扱う各教科の目標や内容を明確に示した年間指導計画を作成することができたことは本研究の成果の一つである。そして何より，その計画作成に向けて，三つの柱に基づいた目標の妥当性や，単元題材で取り扱う各教科の目標・内容について，学部会において，全教員で考察，検討したそのプロセスこそが，カリキュラム・マネジメントそのものであり，推進していく大きな力となったものと考ええる。

今後も継続してこれらの取り組みを学校全体として推進していくことは，カリキュラム・マネジメントの充実のみならず，児童生徒の実態に即した指導や児童生徒一人一人のニーズに応じた支援の充実にもつながるものと考ええる。カリキュラム，教育活動，学校資源が一体的にマネジメントされ，教員が専門性を生かして能力を発揮し，児童生徒の将来の姿を見据えた適切な指導とニーズに応じた支援を行うことができる「チーム学校」を推進していくことが大切であると考ええる。

今後の課題は次の通りである。

## 2 今後の課題

### 1) P D C A サイクルに基づいたカリキュラム・マネジメントのさらなる推進のための取組の充実

カリキュラム・マネジメントを P D C A サイクルにのせて取り組んでいくことは，今後も継続して取り組んでいくべき大きな課題である。本研究は，カリキュラム・マネジメントを実施していく上でのツールやシステム作りがメインであり，さらには，P l a n（計画）の部分に重きを置いたため，D o（実践）やC h e c k（評価）の部分の取組は，不完全であった。D o（実践）の部分において，研究授業等の授業実践を重ねていくことは，児童生徒の目標到達へ直結するものであり，カリキュラム・マネジメントの改善にも必要不可欠なものである。特に，資質・能力の育成を目指した学びを実現するために「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく授業改善の取組を充実する必要があると考ええる。児童生徒のどのような姿が，その学びにつながっているのか，主体的な学びの具体的な姿，対話的な学びの具体的な姿，深い学びの具体的な姿について，考察し，迫支援学校としての具体的な姿，捉えの共有化を図るとともに，主体的・対話的で深い学びを高めるための指導・支援の工夫について考察していくことが重要である。そのためにも，主体的・対話的で深い学びを引き出すための授業実践の積み重ねが必要不可欠であると考ええる。C h e c k（評価）の部分では，三つの柱に対応した評価の観点の共有化や新年間指導計画にリンクした単元題材の反省用紙の様式の検討が課題である。計画・実施・評価・改善のサイクルを児童生徒の目標到達に向けて着実に実施していくことが大切である。これからの特別支援教育の目指す方向性を学校全体で共有し学び合いながら，児童生徒の個々の目標到達へ向けた日々の授業作りに生かしていくことが必要であると考ええる。

本研究の成果と課題を踏まえ、今後も日々の教育活動の中で継続して、児童生徒の目標達成に迫るカリキュラム・マネジメントの在り方について、追究していきたい。新しい時代に求められる資質・能力を育む教育課程を実現するためには、育成を目指す資質・能力を明確にし、各教科の具体的な目標・内容についての共通理解を図るとともに、年間指導計画や単元題材の評価の視点など既存の計画やツールなどに改善を加え、個別の教育支援計画、個別の指導計画、自立活動の計画等の各ツールとのリンクを構築し、児童生徒一人一人の目標達成に迫るカリキュラム・マネジメントの推進が必要不可欠である。「これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い、関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し、育んでいくこと。」これは、社会に開かれた教育課程の要件の一つである。この取り組みを全教員で共有し、児童生徒の目標達成へ向けたより良い支援を目指して一つにつながり、カリキュラム、教育活動、学校資源が一体的にマネジメントされ、学校に携わる人々が専門性を生かして能力を発揮し、児童生徒の将来の姿を見据えた適切な指導とニーズに応じた支援を行うことができる「チーム学校」として、共に進み歩んでいくこ